



ふらんす幻想短篇精華集
呀えわたる30の華々
ANTHOLOGIE DU CONTE FANTASTIQUE FRANÇAIS

1990年8月15日・第一刷発行

PIERRE-GEORGES CASTEX : 編

内田善孝 : 訳

発行人 ————— 川 内 信 夫

発 行 ————— 透 土 社

〒101 東京都千代田区神田神保町2-12

phone: 03・261・3367 facsimile: 03・288・5486

編 集 ————— 嶋 崎 治 子

発 売 ————— 丸 善 株 式 会 社

印刷・製本 ————— 中央精版印刷株式会社

©1990 Yoshitaka UCHIDA

Printed in JAPAN

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは、
法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、
その場合には、予め小社あて許諾を求めて下さい。

上下巻セット・分売不可

江苏工业学院图书馆
藏书章

A N T H O L O G I E
D U

C O N T E F A N T A S T I Q U E

F R A N Ç A I S

Par Pierre-Georges CASTIX

Traduction par Yoshitaka UCHIDA

ii



Anthologie du conte fantastique français.

Copyright by Librairie José Corti, 1987 France.

Published in Japan by Tohdo-sha, 1990.



P. - G. カステノクス 編

内 田 善 孝 訳

ふ	ら	ん	す
幻	想	短	篇
精	華	集	
牙	え	わ	る
	30	の	華
			々

透 土 社



ブック・デザイン

羽 良 多 平 吉

book design Hēiquiti HARATA



ふ
ら
ん
す

幻 想 短 篇

精
華
集

冴えわたる
30の華々

下
巻



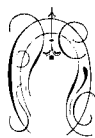
目
次



CHARLES BAUDELAIRE <i>Le Joueur généreux.</i> シャルル・ボードレール ● 気前のよい賭け事師	013
ERCKMANN-CHATRIAN <i>L'Esquisse mystérieuse.</i> エルクマン+シャトリアン ● 謎の素描	023
ALPHONSE DAUDET <i>L'Homme à la cervelle d'or.</i> (Version première) アルフォンス・ドーデ ● 黄金の脳みそをもった男 (初出)	053
HENRI RIVIÈRE <i>Pierrot.</i> (Episode) アンリ・リヴィエール ● ビエロ (挿話)	069
VILLIERS DE L'ISLE-ADAM <i>Véra.</i> ヴィリエ・ドウ・リラダン ● ヴェラ	081
GUY DE MAUPASSANT <i>Magnétisme.</i> ギイ・ドウ・モーパッサン ● 心霊術	101
<i>Un fou ?</i> ● 狂人 ?	109
<i>Le Horla.</i> (Version première) ● オルラ (初出)	119



JEAN LORRAIN <i>Les Trous du Masque.</i> ジャン・ロラン ● 仮面の孔(あな) —————	135
OCTAVE MIRBEAU <i>La Livrée maudite.</i> オクターヴ・ミルボー ● 呪われたお仕着せ —————	149
REMY DE GOURMONT <i>Le Magnolia.</i> レミー・ドウ・グールモン ● マニオリア —————	165
GEORGES RODENBACH <i>L'Ami des miroirs.</i> ジヨルジュ・ローデンバック ● 鏡の友 —————	173
MARCEL SCHWOB <i>La Cité dormante.</i> マルセル・シュオブ ● 眠った都 —————	185
HENRI DE RÉGNIER <i>La Maison magnifique.</i> アンリ・ドウ・レニエ ● 壮麗な家 —————	193
GUILLAUME APOLLINAIRE <i>Cas du Brigadier masqué c'est-à-dire Le Poète ressuscité.</i> ギヨーム・アポリネール ● 仮面をつけた上等兵の出来事すなわち蘇(よみがえ)った詩人 —————	207





CHARLES BAUDELAIRE

1821 - 1867

Le Joueur généreux.

シャルル・ボードレー

気前のよい賭け事師

シャルル・ボードレール

一八二一—一八六七



ふらんす幻想短篇集——下

0 1 0

幻想物語の歴史を綴るものにとって

は、なによりも、ボードレールはエド

ガー・ポーの才能を同時代の人達に紹

介し、原作を凌ぐ^{しの}文学的内容の翻訳をして、ポーの名声を高めるのに貢献した作家である。今日でさえ、『不思議物語』は、ポーが二流の作家としかみなされていないアメリカでよりもフランスでよく読まれている。

一八六〇年頃、ポーの作品はボードレールによって既に大部分が翻訳されており、成功を博していた。読者はロマン主義者たちの常套的^{じょうとうてき}な愛想のいい幽霊や、うぶな悪魔にはいささか飽き^{あき}飽き^{あき}しており、デュパンの厳格な推論の仕方、『モルグ街の殺人』、『盗まれた手紙』の捜査官、『黒猫』や『アモンチャッドの大樽』のなかで、自らの悪事を語る冷静沈着な犯人のシニカルな告白などが大いに愛好された。 Hoffman の後を継いだポーの物語は、いわば、軽やかなポンチにとって代わったジンの強力な陶酔、さ





らに、詩的な幻覚から殺人の妄想への移行であり、夜のあいだの精神の彷徨の代わりに、生まれつき人間に潜んでいる邪悪が描かれている。エドガー・ポーの読者を広げることにより、ボードレールは、夢の気紛れの中からではなく、心の深淵から湧き上る、より強烈な幻想への好みを普及させた。悪魔は夢の中に立ち現れるだけでなく、恋人の心臓に嘴を突き刺す鳥のように、実際に、肉体に爪を食い込ませる。

たとえ時間があつたとしても、このようなお手本を前にして、ボードレールにはどんな物語を書くことが可能だったろうか。幾つかの題名が残されていて、彼の意図を窺うことは可能である。『正夢』、『怪物の教え』、『海中の世界』等々。彼が残したメモによると、『短篇小説は（小説より



シャルル・ボードレール

0 1 1

も）凝縮され、簡潔でなければならぬが、この束縛を逆に絶えず利用し、より強力な効果を發揮する技法について考えをめぐらした。彼自身の脅迫観念を糧として詩を書いたように、構想だけが我々に残された短篇小説にも、彼は同じことができたのではないだろうか。『散文詩』のなか、悪魔との出会いの奇妙な物語を読んでみると、この推測に納得してもらえるはずである。『氣前のよい賭け事師』では、憂鬱から逃れようとして、逆に、さらにいっそう堪え難い孤独に陥っていくのに気がつき、不安がつる詩人の悲劇を再び垣間見ることができると。





師 事 賭 け の 前 氣



ふらんす物語 第百集 下

0 1 4

昨日、大通りの群衆のなかを歩いていると、以前から知合いになりたいと思っていた不思議な存在者と体が触れ合ったのを感じた。一度も会ったことはなかったが、体が触れた途端、彼だと分かった。おそらく、私に対して、彼も同じ気持ちでいたのだろう。通りすがりに、意味ありげな目くばせをし、私はすぐにその意味を理解した。彼を見失わないように注意してついていた。やがて、彼のあとについて、ある一軒の地下の家に降りていった。パリのいかなる高級住宅もたちうちできないぐらい豪華に輝き、足を踏み入れたとたん、まぶしくて目が眩んだ。こんなにも見事な住みかの近くを頻繁に通りながら、入り口にさえ気がつかなかったのは、実に奇妙に思えた。うっとり酔わせてしまうぐらいの心地好い雰囲気につつまれ、生活の堪えがたい嫌なことすべてを、ほとんど一瞬にして忘れさせてくれるものだった。憂い忘れの樹の実を食べた旅人たちが、永遠の午後の光に照らされた不思議の島に上陸して、美しく鳴り響く滝の眠りを誘う調べに聞きほれ、故国や

不吉な美しさがひとときわ目を引く男や女の奇妙な顔があった。すでにある時、どこかで出会ったように思われるのだが、正確に思い出そうとしてもできなかった。見知らぬひとに会った時、普通感じる不安よりも、似たもの同志が感じる親愛感を彼らの中に私は見いだしていた。彼らのまなざしの奇妙な表情をなんとか説明しようとすれば、退屈さを極端に嫌い、人生を謳歌したいという絶えざる願望に、これほど激しく燃えているまなざしは見たことがないと言えるだろう。

腰をおろしたときには、私をここに連れて来てくれたこの人物と私は古くか





ら付き合っている、以心伝心の友人のようになっていた。私たちはお互いに食べ、いろんな種類の極上の葡萄酒^{ぶどうしゅ}を度を越して飲んだ。だが、不思議なことに、数時間たった後、彼も私もそんなに酔ってはいないように思えた。ところで、賭け事は人間の力を越えた楽しみであるが、グラスを飲み干しながら、私たちは賭けに熱中していた。忘れないように言っておくが、私は、既にいくらか彼のものになってしまっていた魂を賭け、勝負に負けても一向^{いっこう}に気にもとめず、さばさばと魂を失っていた。魂は手で触^ふれて感知できるものではなく、しばしば役にも立たず、時として、邪魔物でもあったので、それを失っても、それほど悲しくはなかった。散歩をしていて名刺を落としたほうがもっと意気消沈していたことだろう。



貴府のよい賭け事師

0 1 5

せを彷彿^{ほうふ}とさせてくれた。この心を奪う
快楽に酔いしれていると、突然親しみの
情がこみあげ、なみなみと注がれたグラ

スをとりあげて叫んだ。〈くたばりぞこないの牡山羊^{やぎ}に、永遠の健康を祝して乾杯！〉彼の氣に障^{さわ}ったようには見えなかった。

宇宙とその生成、そして、いつか来るであろう宇宙の滅亡について語り合った。さらに、議論は今世紀の大問題である人間の進歩と、どこまで人間が完璧になれるかという問題にも及び、それから、一般に人間の自負のありとあらゆる形態について話し合った。この件になると、魔王大王は輕妙^{へんぱく}で反駁^{はんぱく}のしようがない冗談を言って、止まることを知らなかった。彼の言い回しには人をうっとりさせるものがあり、平然としておどけたことを言い、私の知るかぎりでは、人類史上名を馳^はせた話し上手のだれ一人として彼に及ぶものはなかった。今日まで人間の頭脳が議論百出させてきたいろんな哲学の馬鹿さ加減を私に説明してくれ、いくつかの本質的な原理をわざわざ教えてくれた。これらによりもた